

# 5. 臨界期ってなに？

## 右脳と左脳が交代する時期!?

子どもたちが言葉を覚えるとき、主語はどれで、それに対する述語がどれ、修飾語はどれに掛かっていき、補語がどう働いているなどと系統だてるわけではありません。そうした文法に類することは説明しなくても、子どもの頭のなかではちゃんと交通整理されて覚えられていきます。ところがこの能力がいつまでもつづくかというところではありません。

ある年齢になると…不思議なことに、そして残念なことに、それは学校に上がる年齢からですが…、子どもはもはや右脳で直感的に覚えるのではなく、左脳で論理的に考えだすのです。私たちはこれを「臨界期」もしくは「臨界時期」と呼んでいます。この時期になると、外国語は幼児期に母国語でやったようにそのまま直接覚えるのではなく、いったん自分の知っている言葉に置き換えて覚えていきます。だから、覚えるのに七転八倒し、時間がかかるのです。

「子どもの脳には臨界時期がある」という発見は画期的なものです。このことに気づかなかった今まではただ遊ばせればよいと、おもちゃを与えて自由にさせていただけでした。そしてじつは子どもの脳が柔らかくて一番伸びる時期を無為に過ごさせていたのです。学校に上がってから「勉強なさい!」と叱り、親も子どもともに苦勞するのです。なぜ、子どもが知的にもすくすく育つ時代に適切な介護をしてやらないのでしょうか。親がやることは、お勉強が“お遊び”と同じように楽しいものだと思ってもらえるような環境づくりと、「よくできたわね、偉いわ」という励ましです。

臨界期という観点からも、幼児教育は「言葉を使い始める前」が一番大切だといえます。

※幼児バイオリン教育の鈴木鎮一先生は、自身の経験から10才を超えて始めた子どもたちにバイオリンを教えてもあまり効果は期待できないといいます。それよりも生まれてまもない乳児たちに、クライスラーやグルミオのレコードを絶えず聞かせて育てます。そして楽器を持てるようになってからバイオリンを教えると、上達の速度が数段ちがうことを発見しました。

